第１２回県政ひざづめ談議結果概要

○ 開催日時 ： 平成 21 年 10 月 20 日(火) 16:00～
○ 開催場所 ： 山梨県男女共同参画推進センター

〔司会〕
大変お待たせをいたしました。『ひざづめ談議』を始めさせていただきます。
本日、司会をさせていただきます、広聴広報課の堀内でございます。よろしくお願いします。
まず横内知事からあいさつをいたします。

〔知事〕
皆さんこんにちは。
今日は女性の異業種の会の皆さん方、お忙しいところを集まりをいただきまして本当にありがとうございます。それぞれの分野で事業活動を一生懸命おやりになってがんばっておられると聞いておりまして、私どもも心強い限りであります。
今日は女性の社会参画についてというようなテーマなんですけれども、山梨県は女性の社会参画という面では余り進んでいるほうではありませんで、まだまだがんばらなければいけない分野だと思っております。例えば県庁職員の管理職に女性がどのぐらいいるかというその割合も、確か２．５％とか、そのぐらいの数値でありまして、余り高くないわけであります。しかしこれやっぱりベースが少ないものですからね、やむを得ないところもあります。しかし最近の新しく県庁に入る職員の割合を見ておりますと、もちろん看護師さんとか、そういう方々は除いて一般職の方で見ても、ちょうど半々ということになっておりますからですね、あと１０年、２０年、３０年と、まあ３０年頃になれば部長さんはもう半分以上は女性になるんじゃないかなと思います。特に公務員というのは女性が適しておりましてですね、この間香港に行きましたら幹部がみんな女性なんですね。聞いてみると男性は出来が悪いけど、女性は出来がいい。公務員の場合非常にきっちりした仕事を必要とするんですけれども、やっぱり女性のほうが仕事をしっかりと責任をゆるがせずにするらしいということがありまして、県庁も追々そうなっていくんではないかなと思っております。
それはともかくとして、今日は女性の社会参画ということだけでなくて、何でも結構でありますけれども、日頃色々と仕事をしておられてお感じになる点を遠慮なくお話をいただければありがたいと思いますので、どうかよろしくお願いいたします。
どうも今日はありがとうございました。

〔司会〕
それでは本日出席しております県の担当者を紹介させていただきます。
県の男女共同参画の推進などを担当しております河野県民生活・男女参画課長でございます。

〔河野 県民生活・男女参画課長〕
よろしくお願いします。

〔司会〕
それでは早速本番に入らさせていただきます。よろしくお願いいたします。

〔知事〕
女性異業種・・。色々多種多様なお仕事をしておられる。もう大分長いんですか、これは。平成９年に始まって・・
余りメンバーを増やさないで活動なされて・・

〔参加者〕
メンバーは最初２６名ですね。やはり最初は女性企業家を募集したところ焼鳥屋のおばちゃんとか、あと一人で洋裁をしている人とか、そういうふうに何て言うんですかね、目標がちょっと違って離れていった人も中にはいますね。人を雇用している人という人は少なかったものですから・・

〔知事〕
そうですか、そうですか。精鋭だけ残ったわけですね。

〔参加者〕
やはり今私たちの会の強みというのは、知事ね、ちょっと名は知れていないかもしれませんけど、やまなし女性異業種の会はちょうど１２年ほど経つわけです。やはり私たちの会は毎月計画を立てて実行をして、反省をする。それをきちんと１２年間やってきましたので揺らぎがないわけですね。それがほとんど勉強会で、仕事が終わってからこのぴゅあ総合をお借りしたりして７時から９時までびっしり勉強してきました。

〔知事〕
一月に一回ずつお集まりになっているって、例会があるんですね。

〔参加者〕
役員会があるから２回ですね。

〔知事〕
今すると何人ですか、この会は。

〔参加者〕
今は１６名で、今日は１２名参加しております。

〔知事〕
まあまあいいとこですよね、１６名ぐらいがね。

〔参加者〕
そうですね。

〔知事〕
お互いにやっぱり気心が知れた仲間というのがね。そしてお互いに切瑳琢磨をしたり、仕事の面でのいろんな悩みとか、そういうのを相談しあったりとか・・

〔参加者〕
ほかの県の異業種交流とも何回かやったんですけど、男性も女性も。やはり商工会議所とか中央会とか、それから法人会とかっていうものの女性部があっても、そのバック団体ということで助成金をいただいてやっています女性の会です、私たち本当に個人で事務局を持ってこういうふうにしてやっていますので、そこのとこらへんがちょっと違うところなんですよね。
だから県の行政とのちょっとタイアップというふうなものも余りなかったから、お耳に珍しい名前だって思うかもしれませんけど、そんなことですね。親団体がないからね。

〔知事〕
今みんなもう商工会議所それから商工会、農業中央会、みんな女性部って言いますけどね。確かに親団体の下働きみたいなことをせざるを得んところもありますからね、縛られちゃいますからね。
それぞれみんな事業をおやりになっているということで・・。

〔参加者〕
山梨県の女性を美しくしようと活動しております。そしてそれは男性の方も、それから赤ちゃんから使えます。
基礎化粧品ということで、それはもう皆さん国民が美しくなると、全部がいいなということで事業をしております。

〔知事〕
効能は非常にあると、素晴らしい。そういえば光り輝いてますね。(笑)
同時に更生保護婦人会。今は更生保護女性会というんですね。私のおふくろももう９５歳ですけど、これ昔一生懸命やっていましてね。山梨県は割と更生保護婦人会って熱心にやってきたんですよね。そのあとを継いでいただいていると。
それと建築士さんをしている方。それと、あっ印鑑製作。そうするとあれですか、あちらの六郷のほうでございますか。

〔参加者〕
身延町の一色になります。

〔知事〕
身延町の一色ね。あの蛍で有名な一色ですね。
あれきれいな集落なんですが、あそこにお店を作っている、お店というか会社を。

〔参加者〕
一応会社はあるんですけど、自宅も会社もずっと昔からそこにありまして、人より蛍のほうがずっと多いです。（笑）

〔知事〕
そうですか。最近一色にもずいぶんお客さんが、観光客が行くようになりましたよね。

〔参加者〕
下部温泉のお祭りは一日限りで終わってしまうから日帰りで帰ってしまう方も多く、泊まっても一泊です。でも蛍のお陰で、その時期３週間は下部温泉の上のほうまで全部いっぱいになって、温泉の方たちが河川の清掃ですとか、蛍祭りにお手伝いに来て下さるんです。すごく助かる。雨が降ってもキャンセルする人はやっぱりいないわけですね。全国から来ていますので・・

〔知事〕
それはそうですね。蛍は晴れようが雨が降ろうがいいわけですからね。

〔参加者〕
はい。ですから３週間は非常に助かるということです。

〔知事〕
昼間は時々通りますが、蛍はまだ見たことがないんですけど、やはり相当、量は多い・・

〔参加者〕
知事、蛍を見ないとだめです。（笑）例えば東京の人たちは１０匹、２０匹のイメージで来ます。でも何百匹という世界なのです。それと他の地域と違うのは、川沿いを１．５キロにわたって散策しながら見て歩ける。１カ所だけではなくて、１．５キロ往復して見られるのです。

〔知事〕
それずっと蛍がいるんですか。

〔参加者〕
多い所、少ない所はありますけれどもいます。

〔知事〕
だけど、何て言うんですかね、農薬もまだ使っているんだろうけど蛍がよく出ますね・・

〔参加者〕
農薬は使っていません。

〔知事〕
使わないようにしたんですか。

〔参加者〕
はい。

〔知事〕
それはえらいですね。

〔参加者〕
それは蛍条例を作りまして、農薬は一切使わない。ただお水がきれいというイメージがあるんですが、きれい過ぎても餌のカワニナが育たないので、まあちょうどほどよく汚いんだと思うんですけど・・。（笑）

〔知事〕
ちょうど川の規模もいい規模なんでしょうね。
それと「ワーカーズおへそ」。リサイクル販売をおやりになって・・。何かグループでおやりになっているんですね。

〔参加者〕
そうですね。ＮＰＯで地域を活性化したいというのと・・

〔知事〕
そうなんですね。聞いたことありますよ、「ワーカーズおへそ」ってね。

〔参加者〕
働けない女性たち、障害を持っていたり、障害を持っているお子さんを育てているお母さんたちが社会に出ていけないので、例え１時間でも２時間でもおへそに来て元気を貰って、そして子どもが育ったら一般社会で働けるような、そういうお手伝いをしています。

〔知事〕
　これは意義のある活動ですね。

〔参加者〕
　そうですね。まだ時給は５００円しか出せないんですけれど、それでも働き場が持てるということで喜んでもらえています。

〔知事〕
　そうですか。
　それとテラワン。清涼飲料水ですね。竜岡で売っているわけですね。採水しているわけじゃない・・

〔参加者〕
　自動販売機を主に・・

〔知事〕
　自動販売機。そうなんですか。どこの清涼飲料を使っているんですか。富士山の泉水とか・・

〔参加者〕
　それは使っていないんですけど､メーカーはサントリーとかダイドー､それからポッカ、大塚などです。

〔知事〕
　なるほどね。そうですか、そうですか。
　あと、有名なこどものプロジェクトをね、一生懸命やっておられて、本当にご苦労さまですね。「ちびっこハウス」ですね。
　色々とまた、何でも結構ですからお話を聞かせていただきたいと思うんですけどね。

〔参加者〕
　今企業も１０年経ってつぶれちゃう、１０年までもたないという企業もある中で、何のバック団体もなく、こうして一生懸命活躍しているんです。私どもの会で一番問題点としては、勉強する場をぴゅあ総合に頼っていると、もう夜９時ちょっと前になると見回りが来て出なければならないんですよね｡結局外に出てもちょっとした会合がまとまらなくて、野外でちょっと話をしたりということが一番ネックになっているんです。１週間でいっぺんでいいですけど、９時半までとか、そういうふうな延長をしていただければ、本当は１０時までがいいんだけどそれじゃ悪いから９時半までででも、気持ち１週間に１度お願いしたいなと思っております。それで横山館長に要望したところ、横山館長が会合にかけたところ、それはできないということで・・

〔知事〕
　会合にかけたらできなかった。

〔参加者〕
　何か会合にかけたらできないということになっちゃったらしいんですけど、トップダウンじゃ悪いですけど、もしそういうことができれば・・

〔知事〕
　これは指定管理者になっているわけだけれども、そういう条件になっているんですかね。

〔河野　県民生活・男女参画課長〕
　館の時間が決められていまして、最終が確か９時になっていると思うんですね。利用の時間帯が決められています。

〔知事〕
　それはもう決まっていて、やまなし文化学習協会が指定管理者として委託を受けているわけですね。もう役所のほうで決めているわけですか。

〔河野　県民生活・男女参画課長〕
　設管条例の中で決まっております。

○横内正明　山梨県知事
　条例ですね。条例を直せばいいわけですね。

〔河野　県民生活・男女参画課長〕
　そうなるんです。そうなんですけど、ただ私のほうにそんな話も横山館長さんからお伺いしたことがあります。ですから、ただ会議で使っているものを９時になったからすぐ帰って下さいということではなくて、まあそこは使っているということで、その辺は館長さんの裁量でということでお話ししてあるんですけど。

〔参加者〕
　９時ちょっと前になると見に来たりされると、どうも・・

〔河野　県民生活・男女参画課長〕
　そこは柔軟的な対応をしていただくようなことで一応話はしてあります。

〔参加者〕
　木曜日だけは９時半までいいよということになれば安心してできるんですけど、それがまた・・

〔知事〕
　木曜日だけでよければよくよく話をして、まあ木曜日だけば９時半までということで、余り嫌な顔しないで・・ね、ということは言いますけども。だけど一般的なニーズとして、やっぱり９時で大体あれですかね、普通の女性の会合というのは９時で大体終わるんでしょうかね。９時ぐらいになれば、大体済むんでしょうかね。

〔参加者〕
　市役所なんかを見ると、南アルプス市役所なんかを見ると９時、１０時になっても大丈夫ですね。だけど、やはりその中では職員がついて下さるから。

〔参加者〕
　私たち指定管理である場所でやっていますけれど１０時まで受けています。それは８時から会合をするところもたくさんありますから。

〔知事〕
　それはそうかもしれませんね。

〔参加者〕
　ですから１０時まで受けるというところもあります。

〔知事〕
　そうですか。なるほどね。分かりました。ちょっとよく考えてみましょう。
　あとはいかがでしょうかね。

〔参加者〕
　あとは､私たちの企業も女性の社会進出をするために何か力を貸してくれということで、女性の今からやろうとしている人たちのためにエールを送る講座ですね。そして起業をしたけど行き詰まっちゃった人とか、何をしていいか分からなくなった人、そういう人の受け皿としてやまなし女性異業種の会が全員で講師となって導いたことが３回ほどあるんですよ。その時は多少の謝礼をいただいて、それも会の活動資金になったんです。そういうふうな活動を県で何かあったらまた入れさせていただきたいなと思いますね、定期的にそういうものがあれば。
　そこの学習をして卒業していった人で立派に社会で企業をなさっている人がおりますね。そういうお役に立てたということも過去にありました。

〔知事〕
　一種の創業相談みたいなことを、コーナーみたいなものを設けて、そういうのに皆さんが交代で出ていって色々と相談に応じたというようなことがあったわけですね。
　それはいつごろやっていたということでしょうかね。

〔参加者〕
　もう９年ぐらい前からやっていましたね。やはりいつも私たちが言っていることは、同じ会社の中にいちゃためだよと。外に出ないと、空気が変わらないと新しいエネルギーをつかめないからということです。それから県の国際課を通じても韓国の女性団体や県外の人とも大勢交流をしました。
　バック団体・親団体がないですから、県には、ほかの県にも女性異業種のような会があったらセッティングしていただければありがたいです。

〔知事〕
　そうですか。確かこの山梨県の甲府盆地の中だけで余りお付き合いをしているだけじゃだめですね。やっぱり積極的に県外だとか、まあ外へ出ていくということでないとね。どうも山梨県というのは盆地なものですから内向き志向みたいなのが強くてね、それじゃ発展性がないですよね。あらゆることがそうだと思いますね。ご商売やっている方々もやっぱり積極的に外へアプローチしていくということは非常に大事なことですよね。
　いかがですか。自分の仕事の関係でもいいですよ、もちろん。別に異業種の会のことでなくたってね。

〔参加者〕
　大手企業さんとかで男女参画計画の一端として、若いママたち、子育て世代からよく相談を受けるのが「育児休業を取りたくても前例がないから、前例をあなたが作りなさい」ということをやっぱり大手企業さんとかでも言われるらしいんですよ。その前例を作ったがために会社へ悪いイメージを与えると困るから、幼い、具合の悪い子どもたちをお姑さんに泣く泣く預けて仕事に行っているという相談をよく聞くんですよね。
　結局、会社上層部や行政の中では話があっても、末端の部分というのは全くそういうことを知らない、育児休業というのはどういうものかというのも浸透していないというのをすごく身をもって感じます。

〔知事〕
　育児休業をまだそんなことを言っている会社があるんですか。

〔参加者〕
　言ってますね。結構・・

〔知事〕
　今当たり前になってきているじゃないですかね。

〔参加者〕
　結構ここにいる人たち、名前を言っちゃえば皆さん知っているような大手企業さんなんですけど・・

〔知事〕
大手企業の工場ですね。

〔参加者〕
いえ、普通の・・

〔知事〕
普通の工場・・、県内大手企業ということですね。

〔参加者〕
いや・・（笑）余り言うと・・。

〔知事〕
告げ口したなんて言われちゃね・・

〔参加者〕
その中でやっぱり末端まで、特に育児をしているママさんたちがそういう相談できる場所とか・・

〔知事〕
それはだけどおかしいですね。育児休業なんて、まあ男性が取るということになると、まだちょっとね、抵抗があったりしますけど、女性が取る分にはごく当たり前に・・

〔参加者〕
産休はすんなり取れるんですけれども、育児休業になるともう話が違うみたいなんですよ。

〔知事〕
産休は当然のことですね。

〔参加者〕
産休はもう浸透しているらしいんですよね。

〔知事〕
育児休業、１年でしたっけね、あれは。

〔参加者〕
育児休業、１年だったと思います。

〔知事〕
　あれは取れない？

〔河野　県民生活男女参画課長〕
　取れます。制度的には当然あるんですけど・・

〔知事〕
　かなり取っているように思ったけどな。確か５０％ぐらい取っているというような数字を見たことがあるんだけど、そうでもないですかね。

〔参加者〕
　公務員ですよね。

〔知事〕
　公務員は率先して取るから・・。

〔参加者〕
　私の弟の奥さんは３年ぐらい取ります、高校の教師ですけども。
　ですが普通の一般企業は少ないと思います。席がもうないですね。

〔参加者〕
　復帰したら席がないということがあるんですね。

〔知事〕
　とんでもないことですね。

〔参加者〕
　復帰したら冷たいというか、自分の仕事はないというか。もうお茶くみになってしまうので・・

〔知事〕
　取っちゃいけないとは言わないんでしょうね、問題が起こるから。

〔参加者〕
　「別に取っても構わないから、今まで前例がないからあなたが前例を作って、あなたがやってみたらどうですか」みたいな振り方みたいなんですよ。結局もう木阿弥になってしまうというか・・

〔知事〕
　まあ明示的じゃないけれど、暗黙の拒否をされているようなものですね。

〔参加者〕
　そうですね。末端の部分というか、そういうところまでそういう男女参画をうたうならしっかりと浸透させてほしいなという希望があります。

〔知事〕
　今、企業は育児休業の実績を出さなければいけないことになっているんじゃなかったでしたっけね。どうでしたっけね。

〔参加者〕
　次世代育成法の改正があるものですから、その事業のため労働局から委託を受けて各企業さんをちょうど今、私が回っているところなんですね。育児休業を取ると、制約は色々あるんですけど、「くるみんマーク」というマークをいただくことができるんですね。そして山梨の場合は今２社「くるみんマーク」取っているんですけれども、じゃあそこが本当に末端までそれが自由に取れるような状況になっているかというと、今のお話に出たようなことが企業の中にあるというのは事実だと思うんですね。全部の企業がということではないんですけどね。ただ企業によってはいくら制度化をしても、上司の目、同僚の目、その辺の教育をしていかないといけないところというのはあります。

〔知事〕
　そうですか。「くるみんマーク」そのものは割と簡単に取れるんですか。

〔参加者〕
　あれも結構制約がありまして・・

〔知事〕
　やっぱりもちろん実績がいくつかなきゃいけないんでしょう。

〔参加者〕
　はい、そうです。まず男性が育児休業を取った実績がないとだめなんですね。そして女性の率も、全体の率もありまして、ついこの間訪問した企業さんも女性の方が育児休業を取らずに産後のお休みだけで復帰してしまったんですね。そこで得点が１ポイント上がらなくて結局「くるみんマーク」取れなくて残念ですなんておっしゃっていたんです。確かに「くるみんマーク」を取ると新卒採用の応募の状況がやっぱり全然違うみたいですね。

〔知事〕
　なるほどね。それはちょっと調べてみましょう。だからそういう所は、結構きちっとやっている所もあるわけですね。

〔参加者〕
　そうですね。

〔知事〕
　だけど、まあ何となくそういうものができないというところもあると・・

〔参加者〕
　あります。企業が大きくなればなるほど末端まできちっと情報が行っているかということですね。トカゲのしっぽみたいなね。一番取りづらいのは同僚の目だと思うんですね。実際皆さんが取る時に、会社の制度がどうとかということではなくて・・。

〔知事〕
　結局やっぱり仕事がそういう人たちに負担が掛かってくるんでしょうからね。

〔参加者〕
　だからそこら辺を企業のトップなり人事なりが、どういう状態に会社の中をやっていくかというところが経営や人事の手腕ではないかなと思っているんですけどね。まあ昔よりは徐々に良くはなってきていると思いますけれど。

〔知事〕
　いや、そうですね。これは大事なことを教えてもらいました。
　よくこれは検討させてみましょう。
　あとはいかがですかね。

〔参加者〕
　私が女性企業家でずっときて、地域の女連協に出たことがなかったんですよね。でも私も６０になったら、今度はそういう年かなと思って、この地域で必要とされてきまして、企業ばっかりじゃだめだなということでボランティアとかいろんなものに出ているんです。
　やはり知事が先ほど言った女性の社会進出が山梨県は私はちょっと遅れているようなことにぶつかります。年配の方が役職を譲らないということが、まずそれがありますね。エゴイストですか、エゴで会議の中でまとまりかけたものをだめにしてしまうとか、それで「こんなこと役なんかやっちゃいられんな」となってしまいます。そして長く役職をやっているでしょう。だから自分の会議のようなつもりでいます。県なんかの会議も見るとほとんど年配の方ばかりですね。そういう所にここにいる若い人たちが行ければと思います。そういう会議の存在を知らないと思うんですけどね。
　年寄りばかりで、そして会合に出ればエゴイストなことばっかり言ってね。それで途中で止まっているんですよね。もうこれじゃ地域の役職なんかできない、となってしまいます。物事が進んでいかないのは、その辺にあるじゃないですかね。そしてやはりいいことはどんどん後輩に伝えていかなきゃ。自分が地位を確保するばっかりでなくてね。そしてちょっと若い人、優秀な人が伸びてくれば、悪いところとかを突きますよね。私もどんど

んチェンジしていかなきゃだめだなと思うけど、私より上の人のほうが多いですよね。だからその辺を県でもそういう何かうまい方法で・・

〔知事〕
　年齢を、じゃあ６５歳までとか・・(笑)

〔参加者〕
　しがみついている人がいっぱいいます。

〔知事〕
　女性団体の会長さんは６５歳までとか・・(笑)
　まあ山梨県というのは割とそういう、まだそうですね、確かにね。古いというよりも、何て言うかな、そういうところがあるんですよね、まだね。

〔参加者〕
　今年は変わるだろうと思っても、また変わらない・・。

〔知事〕
　まあ確かにね。まあだけど県庁が色々言うわけにもいかないところがありますけどね。

〔参加者〕
　だからその進まない原因がそういうところにある女性会議なんていうものをこういう若い人たちにどんどん知らせてね、やったほうがいいと思いますよ。みんな知らない人ばっかりですよ。

〔知事〕
　女性会議なんていうのは、例えば参加者を募ったり何かするのはやっぱり女性団体連合会だったり、山梨県婦人会連合会とか、ああいう所を通じてやるんでしょう。

〔河野　県民生活・男女参画課長〕
　そうですね。

〔知事〕
　やればそうですね。年功序列で行きますね。そして行ってみたらどうなんでしょう。やっぱりほかの県は若い人が出てくるんでしょうかね。

〔参加者〕
　ええ、私も初めて今回行くから・・

〔知事〕
確かにね、おっしゃるとおりですね。

〔参加者〕
知事、よろしいですか。
私は農業の問題をお話させていただきます。自民党から民主党に変わって、農業関係予算が４，７００億削減されていくだろうと言われています。
また､女性がかなり県でも登用されているんですが､県で農業委員は全部で６３２人中、女性は１５人、２．４パーセントしか女性の登用がございません。多分議会推薦だと思うんですけども。そして私もう一つ指導農業士をいただいているんですが、これは９７人中８人が女性、８．２パーセント。ただ、多分知事に変わってから審議会、２０年度は、これ県庁で調べたんですが、８７審議会の中で９８７人中３６１人、３６．４パーセントが女性で全国９位だそうです。全国の登用は３２．３パーセントということで、山梨県はかなり高い割合です。

〔知事〕
審議会なんかはですね・・

〔参加者〕
多分それは知事に変わってということなんですが、農業の活性化の中で私がとても思うのは、やはり子育てです。子育てということは結局次世代を育てることです。やはり私たち女性が魅力ある農業になるよう活性化していかないと、絶対次は育ちませんね。
今まで見ていく中で女性の教育の場と言うんですか、農業の、この予算がかなり県で削られております。身近では、農政に関する女性の勉強会が削減されていて劣悪な状況と言っても過言ではございません。やはり農業の活性化ということでは、女性がもう少し質を上げていったりすることが、最短で、かつ活性化になる一つの手段であると思います。
私は全国研修とかにも行かせていただくんですが、交通費とか宿泊費は免除していただける県がほとんどでございます。山梨県ではそういった制度はございません。今度１１月には全国会議にもリーダーとして出させていただくものがございますが、是非そういった予算付け、是非女性のリーダーを育てていただけるように、こちらのほうも予算付けをしていただきたいなと思います。

〔知事〕
なるほどね。そんなにお金が減っていって、予算が減っているんですか。

〔参加者〕
はい、減っています。そうですね、視察も減りましたし・・

〔知事〕
視察もね。

〔参加者〕
　先進地視察もかなり減りましたし、やはりいろんな勉強会もかなり減っております。今ＪＡの団体で女性団体が強いのは、中国地方は強いんですけれども、私たち峡東の辺はもうほとんどないので、女性が勉強する場が少なくなってまいりました。なのでやはり女性が勉強していただける機会が多くなりますと、山梨の農業がもっともっと魅力的になると思います。

〔知事〕
　そうですね。山梨の農業というのは女性が支えているようなところがありましてね。やっぱり桃にしても、ぶどうにしても、まあ剪定だとか、色々手間が掛かりますよね。半分は女性がやっているんですよね、みんなね。

〔参加者〕
　そうですね。力仕事は男性が行うことがありますが・・

〔知事〕
　男性は無尽だ何だなんて言ってすぐどこかに出掛けちゃう・・。（笑）お母さん方一日中こうやっているからえらいやね、全く。

〔参加者〕
　是非、そこの予算削らないように是非・・

〔知事〕
　分かりました。よく言っておきましょう。（笑）
　女性の教育研修のあれですね、経費ですね。そうですか、分かりました。
　そういうあれに出て、そしてその後も集まりを持っているというのは多いんですよね、割とね。何か昔かつてこういう会合があって、女性の教育研修みたいなのがあって、それをその後もお互いにお付き合いをしてね。

〔参加者〕
　是非ご尽力賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。

〔参加者〕
　何か時代に逆行しているかもしれないんですけれど、私は女性の社会参画にすごい不満を感じています。もちろん自分もどんどん出て働いていまして、今までもずっと働いているんですけれども、社会が女性を必要としていると同じぐらいに、家庭が女性を必要としていると思うんですよ。やっぱりそれをこれから社会参画を考えていく上で絶対忘れてはならないというか、それを意識して女性社会参画を考えていかなければ、もうこの世の中

の荒廃とかがどんどん進んでいくと思うんです、犯罪も増えて。
　それで何で女性が外に出ていかなくてはならないのかなというところが問題だと思うんです。それを考えた時に、やっぱり家庭で働く女性を一番身近な夫がまず認めてない。家でごろごろしているじゃないかとか、そういったことが女性を外に出すきっかけになったと思うんです。そしてやっぱり昔と違うので、どうしても核家族にならざるを得ないんですけども、そこで経済的に女性が働かなくてはならなくなった。それから子育てをする上での悩みがたくさんあるけれど、それを一人で抱えていくうちにノイローゼになってしまう。
そういったことが家庭内の問題になって離婚をしたりとか、そういった問題につながっていくと思うんです。
　社会参画をしていってる女性がもっと家庭の仕事をしていて認められることとか、社会交流を増やすとか、そういったことを何とか改善する方法はないのかなと、いつもすごい思うんです。半分働いて、半分家庭をとか思うんですけど、そこのことは言ったら時間がとても足りない、思いを伝えるのは足りないんですけれども、こういった席だからこそ言いますが、やっぱり女性が家庭を守ることで男性は安心して働くこともできるし、子どもが健やかになることだと思うんです。そこを意識した上での社会参画を考えて、女性が社会参画できるには家庭も守りながらできる方法を絶対考えていかなくてはならないなってすごく思います。

〔知事〕
　なるほど。確かにね。それは確かに理想ではあるんですけれども、しかし一方においてやっぱり女性の皆さんが積極的にその社会に出ていきたいという、そういう自己実現、欲求みたいなものが非常に強くて、少なくともやはり子どもを育てたり何したり、家事はやりながら社会に出ていけるような環境を整えるというのが、今政府がやっていることですよね、そういう方向でね。できるだけ女性を家庭にとどめるというよりも、むしろ積極的に少しでも出ていくというニーズ、出ていきたいというそういう思いというものを、縛りつけないようにできるだけ制約を外していくと。まあ金銭的にも、まあいろんな面でですね、という方向になっていますけどね。

〔参加者〕
　でも､家庭から女性が出ていくことによって､世の中こうなったじゃないかと思います。どんどん出させてくれる場を作ってもらって出ていったら、今世の中こうなっているじゃないですかと。
　もう少し女性が家庭に留まっていてもストレスを感じないで、それは都合のいいことかもしれないんですけど、男性が会社で働くと同じぐらいの、そういうことを何か考えられないんでしょうかと。うまく言えないんですけれど・・

〔知事〕
　いわゆるＳＯＨＯ（ソーホーsmall office home office）とかいって、ＩＣＴを使って、パソコンはもちろんみんなできるわけですから、それを使いながらそういう労働をすると

かというようなことはもちろんありますよね。それから時間労働で数時間の労働だとか、そういうできるだけフレキシブルな雇用形態を作るとか、色々やってはいますよね。やってはいますけどね、しかし基本的にはやっぱり女性を家庭に縛り付けるという方向は望ましくないと。女性の需要に応じて社会に積極的に参加、参画できるように、そういう機会を広げていこうと、あるいは制約を外していこうというのが方向ですがね。

まあしかし、その結果社会が悪くなっているということはあるいはあるかもしれませんが・・。そうですね、だけど大きな流れとしてはやっぱり女性がどんどん自分の能力を生かすために社会に出ていくというのが流れなんでしょうね。日本の場合、やっぱりある意味独特でね、よくＭ字曲線なんて言うじゃありませんか。ずっと若いうちから２０代、二十歳過ぎて３０までずっと雇用就業率が上がっていって、結婚した３０ぐらいからずっと下がってね、そしてまた４０か５０になってまた上がるというような、やっぱり子育て、あるいはそういう必要な期間というのはまだ依然として就業の場を離れるというのは多いですよね。しかしそれが段々段々やっぱり欧米型に上がっていくだろうと、また上がっていかなければならない。だから今はもう例えば０歳児保育などといって、０歳、１歳、２歳ぐらいまでの子どもを持っていても働くことができるように保育所施設を整備していくとかですね、そういう方向になっていますけどね。

〔参加者〕

先ほど会長が言っていましたように、やっぱり年配の方がそういう所に行く機会が多くて意見を言うと、やっぱり若い人の意見は届かないんですよね。それによって例えば選挙とかも思ったんですけども、やっぱり年配の人が多くて、何で若い人に行かないのか聞いたら、「どうせいってもだめじゃん」とか。一番ストレスや不満、不安を感じているのは結局１０代から４０代の人が多いんですけど、その人たちの声はほとんど行政にも届かないんじゃないかなと・・

〔知事〕

確かにね、それはそのとおりですね。特に若い人の声というのは届きませんね。

〔参加者〕

その結果、結局目先の利益にとらわれたものに流れていってしまうからうまくいかないんじゃないかなというか、そういうことを感じます。

〔知事〕

まあ例えば子育てをしている若い母親の声なんていうのは余り届かないんですよね、実はね。一生懸命やっているものですから、まあそういう方々でも社会に出てくる人はいるんですけど。かなり多くの人が依然として家に留まってやっていますからですね。だからそういう人が積極的に社会に出てくるようにしなければいけないと思うんだけど、確かにおっしゃるとおりですよね。余り届いていませんね。選挙の前に出てくるわけでもありませんしね、余りね。

〔参加者〕
　男性の協力の仕方しだいじゃないかなと思いますけどね。外に出て、今こういう状況になったというのは、今まで男尊女卑で、男性が上にいて女性が社会に一生懸命出ようと思って出ても、男性はなかなか女性に協力してくれなかったでしょう、家庭の中でも。でもそれが今の若い人たちは、もう男性も女性も同じだからといってお皿洗ったり洗濯してくれたり、だから徐々にそういうふうになっていくじゃないかと思うんです。今おっしゃったような立場としては、やはり男性の協力があればうまく行くんじゃないかなというのがあります。

〔知事〕
　それは全くそのとおりですね。しかしなんですね、少子高齢化が進んでいって、例えば２０５０年というから、あと４０年後なんていうのは、本当に、今のまま行きますといわゆる勤労、働く人々対養われる人々、高齢者世帯との割合というのは働く人たち１．５人に１人お年寄りを養わなきゃいかんというような状態ですよね。そういう状態になると余り、女性でもやっぱり働く能力のある人たちに積極的に社会に出ていってもらわなければ社会がもたないということもありますよね。

〔参加者〕
　女性の眠っている力がかなりありますからね。それを引き出して社会に貢献していく・・

〔知事〕
　そうですね。与謝野晶子が、「女性はまだ未だ磨かれざる宝です」と言ったことがあるけれど、そういうところがありますよね。少なくともそれぞれみんな能力をお持ちですから、そういう能力は生かしたいと思う方はそれが１００％生かせるような、そういう条件を作ることは大事だと思いますね。山梨の場合には、まだいわゆる待機児童なんていうのはいなくてね、ということになっている、役所からの報告によると。余り私は信用しないんだけども、どうもそう言うんですね。

〔参加者〕
　いや、それだけは意見が言いたいですね。要は、例えば日本全体を見ていただくと東京はもう何万人もいる、名古屋も何万人もいる。だけど田舎は全部空いている。それ全体を山梨県に当てはめれば同じで、甲府の中心に近い所というのは入りたくても入れない子がいっぱいです。だけど「白根が空いている、上九一色が空いている、大月で空いている」ということになると、その人たちは、要は空いている所があるんだから待機児童じゃないよという話になっちゃう。そして私、県に聞いたんですね。「待機児童って、じゃあ一体なんですか」と。そしたら待機児童というのは「Ａ保育園に入りたいけれどもＡ保育園が満員。空くのを待ちますといって名簿に名前を書いた」のが待機児童なんです。
　でも、このお母さんは働きたいので待っている場合じゃなくて、老人ホームが３００人待ちとかと違って、保育園というのは少しも時間がないんですよね。なので「甲府で空いてない、残念。では中央市。あっ中央市でない。じゃあ郡部のほうに」と一番端っこまで

預けに行っているのが現状です。そしてそこでもうまく合わないと無認可保育所に入れています。実際県内でも昭和とか増穂とか、０歳児保育をやっていない所では無認可保育所に高いお金を出して預けているのが現状で、山梨県内の潜在的な待機児童はものすごく多いんです。これは直接お母さんたちに聞けば、「預けたい、預けたい、でも預けられない」というのが本当にたくさんいるんですね。

ただ名簿に名前を書いたら１なんで、だから私名簿に書く運動しようかなと思っているんです。本当にそうじゃないと数字が上がらないじゃないですか。

〔知事〕

その場合に、評判のいい保育所ってあるじゃないですか、そこに行きたいと。

〔参加者〕

保育園、特に未満児の場合です。３歳以上児は幼稚園も長時間保育やっていますし、保育園もたくさんあるので満たされた状態です。言い直しますと３歳以上は待機児童０で間違いないと思います。未満児です。０、１、２歳。３歳未満の子どもたちが行く場所がない。

〔知事〕

０、１、２歳のところですね。だから０歳児保育が余りしてないということですかね。

〔参加者〕

そうですね。特に０歳ですね。ですからある病院の看護師さんは、「人が足りないから早く育休から復帰してと言われたけど、だって子どもを預ける所ないもん」と言ってました。企業内託児所も軒並み満杯で、特に病院なんかの待機児童はいっぱいいるんじゃないですか。認可保育所じゃないと待機児童って数字に上がってこないんです。ですから実質の待機児童を探す方法を取らなければいけないと私は感じています。

〔知事〕

探す方法を取らなければいけない。

〔参加者〕

はい、いけないと思います。要は保育園に入れますかという問い合わせはたくさんきていると思います。ただそこで園長が「来年の３月までいっぱいですよ」と言っちゃうと、そのまま「はい、分かりました。じゃあほかに聞きます」となり、待機にならないです。

そしてお母さんは、しょうがないからもう１年就職するのを待ってしまいます。

〔知事〕

なるほどね。やっぱり０歳児から３歳児ですか、その場合は。それ以上は大丈夫なんですか。

〔参加者〕
　そうです。幼稚園も、前は年度で３歳児と呼ばれるように、３歳の誕生日を迎えた次の４月から入園する場所だったんですけれども、法律が変わって満３歳を迎えたら中途でも入れるようになったんですね。幼稚園も保育園も満たされていると思います。

〔知事〕
　そうですか、０歳児保育ね。分かりました。それはそうなんですよね。
　いかがでしょうかね。また別の話でもいいですけど。自分のご商売の悩みでもいいですよ。

〔参加者〕
　老人看護についてですけれども、何かあると程度によって施設に入所したり、デイサービスに通っています。でも昔は全然そんなのがなくて在宅で最期を看取っていました。それを発展させて、在宅で看る方に介護料を与えたら家でも看られるような気がすると思うんですよ。それなら収入になりますからね。
　看る方、お嫁さんなり娘さんなりに補償を出せば、勤めなくてもある程度子どもをみられる、家庭もみられる、そして介護ができる。その指導は保健師、役場にしていただければ、もっといいかなと思います。

〔知事〕
　おっしゃるようにヘルパーさんを雇えばヘルパーさんにお金をやるわけですから、じゃあお嫁さんがやっているんじゃお嫁さんにやればね・・

〔参加者〕
　家族の関係もありますけどね。今はもう別居した形の生活で、昔と違っていますよね。ですけど、うちはちゃんと息子が入って二世帯でもなくて、食事も風呂も一緒です。
　老人になれば自分たちがどういうふうな生き方をするのかと若い人はなかなか考えられないですからね。自分が老人になったらどう過ごすんだということを観点において、年中家族で話します。そしていよいよ入院になったら高度医療はいらないとか、話しますね。まあ人によってでしょうけどね。医療費がすごい莫大ですよね、もうパンクしそうですよね。そういう家族との話合いもしております。

〔知事〕
　そういうお話をしておられるんですか。それは幸せですね。
　それで最初におっしゃったのは、まあお嫁さんならお嫁さんが介護してくれるなら、お嫁さんに補償をくれれば・・

〔参加者〕
　それに補償を出してもらえば、もっと日本の介護予算を安くできると思います。

〔知事〕
　お嫁さんがヘルパーの資格を取ってくれれば出してくれるんだよね。

〔参加者〕
　だからそれは保健婦さんの指導とか、家族を看るんですから、それに合った指導をしていただければいいような気がしますけど。まあそれは一部の考えですけど・・

〔知事〕
　いや、そういう考え方があることはあるんですよ。だって結果的にお嫁さんに負担が掛かるわけですからね。だからやっぱりそういう方々に何らかの報酬を与えたほうがいいんじゃないかと。在宅介護、在宅介護って言ったって、お嫁さんのその犠牲でもっているなんておかしいじゃないですかということをいうことを言う人はいますよね。
　だけどなかなかやっぱりそこまで踏み切れん、お金も膨大になってきますから。だけど考えてみれば、それやって施設介護が必要なくなれば、それはむしろ安上がりかもしれないという感じはしますよね。まあそういう考え方は確かにあることはあるんですよね。

〔参加者〕
　姑さんとお嫁さんという関係もあるかもしれません。まあ娘でもいいんですよね。そうすると仕事に出なくて家庭もやったり。まあ外に出て活動もいいけど、それも一部あるかなんて思っております。

〔知事〕
　これはちょっと、まあ県や市町村がというよりも、やっぱり国の制度としてどう考えるかということですよね。

〔参加者〕
　私は会社を経営させていただいておりまして、仕事の内容はイベントとかブライダルの司会、あとは県内セレモニーホールと管理契約をさせていただいています。今スタッフが正社員とアルバイト・パート含めて２０人、全員女性です。
　仕事柄３６５日お仕事の依頼を受けるという中で、まだまだ立ち上げて間もない会社なので私が経営者ということもあり、ほとんど休みなく、お正月三が日お休みぐらいです。自営業をしている主人と、９３歳の主人の母親、小学校５年生の息子がおります。いくら経営者である私でも代表の仕事を抱えていて後ろ髪を引かれるような思いで具合が悪いおばあさんや息子を置いて仕事に行かなければいけない。うちの場合はある意味ワークシェアリングを家庭の中でしている感じで、主人の協力の下にしているんです。
　そういった時に小さい子どもさんですとやっぱり保育所など一時的に預かってくれる所があると思うんですけれども、やっぱり９３歳の母ですと介護保険の申請をしていない元気なおばあちゃんなので、急に具合が悪くなったという時に、困ってしまいます。どこに聞けばいいのか分からないです。
　そういうお年寄りが具合が悪くなった時に行政に連絡をすればさっと預かってくれるよ

うな所があればと思います。高齢者の介護保険とか手続きを踏んでからのことではなくて、何かあった時に聞けるところが各地域の行政であってほしいなと思います。そういったこともこれからまた提案していこうかななんて思っているところで・・

〔知事〕
まあそれは色々な市町村の高齢者福祉担当の課があって、そういう所に聞けば色々と・・

〔参加者〕
事前に言っておかないといけないので・・

〔知事〕
デイサービスに行っていないんですか。

〔参加者〕
本当に元気なおばあちゃんなので、全く介護保険の認定もしておりません。ただ私も無知なのでまだそういうことも知らないんですけれども。

〔参加者〕
山梨大病院の小児病棟で遊びのボランティアとして活動しています。そうしたら今度は病院全体のボランティアコーディネーターがいないということで声を掛けられたんですけど、他のことをしていますから私はちょっと無理だったんです。そこで思ったのですが、いろんな病院にボランティアコーディネーター一人だけでもいてくれたらと思います。あとはボランティアさんを募ればよいだけです。一人だけでもちゃんと給料を払って、しっかりその方が勉強すればと思います。病院の総務とか、そういった人たちとお話していくと総務の仕事がお忙しくって、私たちと係り合いはほとんどできないものですから、自分たちで開拓していかないといけないんですね。
定年を過ぎた方はボランティアをできますから、その方々の生き甲斐に変わってきますし、生き甲斐というのはいい笑顔がある社会に変わっていきますので、少しでもそういうボランティアコーディネーターを育てていただければ、そこから大きな輪が広がってくると思うんです。

〔知事〕
ボランティアコーディネーターというのは大事なことだと思いますよね。ああいう県内の病院にはボランティアコーディネーターを置いている所はあるんですか。

〔参加者〕
いやー。

〔知事〕
　聞いたことないですか。

〔参加者〕
　ほかの病院の所に勉強に行った時には、長野こども病院とかでいるような・・

〔知事〕
　一人だけでもいいんですよね、専門のね。いろんなボランティアさん、こういう分野のボランティアさんを是非募ろうと。そして集まってもらって、そしてそういう方々にも色々とお願いをしたりとかね、そういうことは大事なことですよね。

〔参加者〕
　県外の色々大きな所に勉強に行くと、ああすごいなと思って帰ってくるんですけど、私は本当に小さな団体でやっているだけなんです。そうやって地域を元気にするというのは、やっぱり女性の力を使わないと無理なので。
　そして県民生活課とかへ電話していても、担当が異動してしまいます。そうするとまた新たに自分たちをＰＲして、「『おへそ』ってこうやっているんですよ」と言って理解していただいて、がんばって欲しいという時にはまた異動でいなくなってしまいます。

〔知事〕
　そういうやっぱり専門職もいなければいけませんよね。

〔参加者〕
　そうですね。みんな変わっちゃって・・

〔知事〕
　課長さんなんかよく変わりますからね。最近毎年変わっている、課長はね。まあこの人が悪いわけじゃない。私が採用して、私が動かしているんだから私が悪いんだけど・・。まあ課長さんも少なくとも２年。一般の職員さんは３年ぐらいいなきゃだめですよね。

〔参加者〕
　本当に悲しいです。あんなに分かってくれたのに・・

〔知事〕
　ようやくと思ってもね。それはそのとおりですね。
　いかがでしょうか。

〔参加者〕
　私はそれほど県に対する要望ってそれほどはないんです。一つ、冒頭知事が女性の管理職の割合をなんていうお言葉をおっしゃって下さったので、今、私、労働委員会にいるん

ですけれども・・

〔知事〕
労働委員会の委員さんですね。

〔参加者〕
はい、公益委員で。
暮れにはいつも食事を一緒にさせてもらっています。

〔知事〕
いやいや、それはご苦労様でございますね。

〔参加者〕
先ほどの方の所のスタッフは全部女性ということですが、私の所も人数が少なくて５名ほどですけれども、一応全員女性です。まあそのスタッフの人たちの社会参画に一応協力をしているのかなと自分ではそういうふうに思っています。
社会保険労務士という仕事をしていく上では私は女性であることが逆に有利に働いてくれていると思います。

〔知事〕
ほー、社会保険労務士の場合はそうですか。まあ緻密ですからね。

〔参加者〕
例えば労働委員会も公益委員に社労士を入れようよという話があった時に、山梨は使用者側も労働者側もほとんどが男性でした。他県は労働側に執行委員長さんで女性がいらっしゃったりするんですけど、山梨の場合は労働側５人、使用側５人、全部１０人男性ですよね。そうすると女性をもってくるのは公益委員しかいない。一人は大学の先生とかでいらっしゃるんで、社労士を入れる時に女性の社労士をという声が掛かったんです。

〔知事〕
社労士さんというのは女性の割合が割と高いんですか。

〔参加者〕
いや、高くないですね。２割までは行っていないと思うんです。

〔知事〕
でも弁護士さんよりはちょっと多いという・・

〔参加者〕
　そうですね。だからといって甘んじているというわけにはいかないんですけども。
　うちの事務所で求人を出す時に、質問シート、まあ採用試験みたいなものをしています。その中に『あなたが今までの仕事をしてきた中で、自腹で買った本ありますか？』とか、『自分でお金を出してセミナーに行ったことありますか？』という質問があるんですね。だけどほとんどの方がそれを『ない』って書いてくるんですね。やっぱりそれだと仕事をして仕事の中で認められたいというのは、ちょっと難しい部分もあるかなと思うんですね。
　必ずしも男性以上にがんばらないといけないということではないし、肩ひじ張ってがんばり過ぎる必要もないんですけど、目の前の新聞でいいから経済面を読むとか、それからビジネス書をちょっと買ってみようよという、そういう所から第一歩が始まると思っています。
　私は２１世紀職業財団という所から「Ｒｅ・Ｂｅワークセミナー」という、いったんお仕事を休んだけど、また復帰しましょうよというセミナーをやってくれませんかということを時々仰せつかっているんですね。その時に女性のみんなにお話するのは、「自分から変えようね」という話をするんですね。まず夫の理解が、家族の理解がということを前面に出すんじゃなくて、自分が変わっていくことで相手は認めてくれる、と話をします。国の政治を変えましょうって、私一人の力では絶対無理なんですね。県を変えようといっても無理です。県庁の仕組みを変えて下さいと要望しても無理です。夫を変えようと思ったって身近な夫だって無理なんですよね。でも自分を変えることって一番簡単なことなんですね。それでもやっぱり自分は変わらないんですよね、誰しもね。そんな自分を変えることも難しい中で人を変えるなんてことはもっと大変なんだから、自分から変わって、時間は掛かるかもしれないけど夫から認められて、地域社会から認められてということを働く女性の皆さんにはメッセージとしていつも送っているんです。時間は掛かりますよね。そんな発信をしています。

〔知事〕
　そうですか。なるほどそれは立派ですよね。労働委員さんやったりね、そうやって色々なそういう会合で講師をやって、女性を大いに啓発をしておられるというのはね。そうですか、是非がんばってもらいたいですね。

〔参加者〕
　だから特段要望はないんです。

〔知事〕
　今、労働委員会は忙しいですか。ちょっと不景気で忙しい・・

〔参加者〕
　いいえ、山梨は暇です。

〔知事〕
　そうですか。

〔参加者〕
　この景気で労働委員会が忙しくなるぞとみんな心構えしていたんですけど、労働委員会には・・

〔知事〕
　なかなか提訴して来ないんですね。

〔参加者〕
　やっぱり労働局の相談窓口が一番利用人員は高いですね。

〔参加者〕
　私は幸か不幸か今独身でおりまして、親も元気ですから私自身は仕事に本当に打ち込める状態で、非常に恵まれた状態ではあるんです。
　今後その人口が確実に減っていく中で女性の社会参画というのは、昔と違った意味で本当に必要に迫られてもう働かなければならないという部分が出てくると思うんですね。こういった景気で昔みたいに旦那さんの賃金が上がっていくわけではなく、女性も働きにでなくてはいけないのです。私どもの従業員に「何かある？」と聞いてみたところ、「学校の休みが多過ぎる」とのことでした。県ではなくて、これもまた国とかになってしまうかもしれないんですけど。心置きなく働くために、昔みたいに土曜日に授業をやってほしいと。あと学童に行かせている子なんかは、学童ではなくて学校でそのまま夕方遅い時間まで置いてもらえないかということですね。それとあと授業参観等の学校行事、どうしてもお母さんが出ることのほうが多分多いんだと思うんですけれども日曜日にやってほしい。
　「仕事をしたい、稼ぎたい」、時間給で働いている人は特に稼ぎたいと。あと責任を持った仕事をやりたいと思っていても、どうしてもその学校行事とか何とかで抜けなければならない。すごくそれも辛いと。学校はとにかく休みが増えている。土曜日も休み、夏休みも冬休みもあります。この前、秋の５連休が終わったと思ったらまたインフルエンザで１週間学校が休みになって、子どもも「もう学校に行くのが面倒臭くなった」と言い出すし、親も働くのにやっぱり子どもを置いてくるのに気がかりになるとか、そういった意見がありました。
　必要に迫られて、みんな本当に稼ぎたいといいます。女性の社会参画は、できた頃の目的とはまたちょっと違ってきていると思います。多分時代も変わって意味合いも変わっているんだと思うんです。稼ぎたいと言っている社員がすごく多いので、会社としても働いてもらいたいと思っています。幸い今仕事がありますので・・

〔知事〕
　やっぱり旦那さんの給料が落ちてきますからね。しかし生活水準は余り下げたくないわけですから、どうしても奥様は働きに出るということになりますよね。

〔参加者〕
　そして子どもの教育費はどんどん前より掛かっていますし・・

〔知事〕
　そう言われてみれば学校はそうですよね。学校が段々休みが多くなったり、夕方までというのは、いわゆる児童保育と言いますかね、学童保育をやっていますよね。

〔参加者〕
　今、学童も預けているんですけども、そこまで迎えに行ったりとか何とかというのもあります。先生が夕方遅くまでいらっしゃるなら、そのまま子どもも置かせてもらえるシステムができないかということですね。先生の負担は大変かもしれないですけど・・

〔知事〕
　先生の負担は大変です。

〔参加者〕
　多分休みが多過ぎて稼げない。まだ月給で働いている社員はいいんです。パートのお母さんはやっぱりもっと稼ぎたいと。

〔知事〕
　なるほどね。まあワークライフバランスなどということを段々日本も言うようになりましたけれども、アメリカやヨーロッパはもうなんですよね、夫も妻もそれぞれ完全に分担しあってかなりやりますよね。両方とも勤めてやっておられるというのが多いんだけど、まだ日本はやっぱり女性のほうにそういう負担が掛かってくるというのは大変ですよね。そうですか、なるほどね。それは本当に切実な悩みですよね。
　そういうことがクリアされればまだまだ働きたいという、なんぼでも女性は集まるんですか。

〔参加者〕
　はい。それとその働きたいという人がいっぱいいるんですが、やっぱり今景気が悪くて雇用先の確保が先です。だから今で言うと、とにかく雇用先がないことには出たくても出られない、今ですとね。やっぱり景気対策が一番大切なんじゃないかと思います。

〔参加者〕
　先ほどの待機児童の件、０歳児から３歳児までは預かってくれる所がない件ですが、何人かに聞かれているんです。例えば、２人赤ちゃんがいる方は、ノイローゼ気味になっちゃって、１人ぐらいは預けたいと言っておりました。そういうのを何とか窓口がどこかに一つ市とか県とかにあれば相談できると思うのですが。

〔知事〕
　それはあるんじゃないですかね。まあ基本的には市町村なんですけどね、そういうことは。

〔司会〕
　もっと遠慮なく市役所とか県庁とかに相談されると道が開けてくるかなという気はしますね。

〔参加者〕
　仕事をしていないと預けられないというのが日本の長い歴史です。これからは保育の必要な子どもを預けられるというシステムに変えていかなければいけない時代がようやく来ていると思います。最近非常に感じるのが、「たった一人の子どもだから私は３歳までこの子をしっかり育てるの、私がんばる」と言っている人が一番心配で、結局家からも出ずに母と子で二人きりでいろんな英才教育の本を買ったりして、「誰の手も借りない。私の責任で、私が育てる」と言ってがんばっちゃって自滅している人がいっぱいいるのです。現代は、うまく交流しながら子育てをしないと子どもが不幸になると思います。

〔知事〕
　子育てをしているお母さん方というのは色々な機会がありますからね。
　そういう所へ持ってこなきゃだめ、連れて来なければ、一緒に来なければだめだね。

〔参加者〕
　特に私、県外から山梨に来て思うのは、高齢者が非常に元気なのです。先ほどの学童の問題もそうなんですが、私は山梨の未来スタイルとして、高齢者が近所の赤ちゃんを見たり、また高齢者介護もしていくという新しいスタイルを作っていかなければいけないと思います。ですから私も要望としては、余り国にとらわれずに、新しくて山梨らしい、「山梨の保育スタイル」をいろいろチャレンジしていきたいです。

〔知事〕
　そうですね。まあいろんな市町村に子育て支援センター的なものがあるじゃありませんか。そういう所に、まあ高齢者といわず、子育てを終わった方々がおられて、ボランティアとして、そしてそういう所へ来て預けてというのがありますよね、そういう例はね。

〔参加者〕
　ただ、そこは本当に専業主婦がちょっと骨休めに行く場所になっているのです。
　お仕事をしたい方は、特に保育園で「一時保育」も「週に１回同じ子どもを預かるシステム」もないんですね。だから今ワークシェアをするためにも週に３日とか、週に１日とか、画期的、柔軟な保育体制を、私は是非日本がまだやっていないことを山梨から新しいスタイルを作れたらなと思います。

〔参加者〕
　よろしいですか。今日、ここに参加したいんだけども体調を崩したメンバーが１名おりまして、文書を寄せているんですね。それをちょっとだけ紹介させて下さい。

〔参加者〕
　上野原市の建築士事務所の代表からです。長年、男女共同参画推進のために携わってきた方なので是非聞いて下さい。
　『一つ目は、男女共同参画ということの基礎的な、根本的な知識をまとめていただきたいということです。現在は各市町村が試行錯誤しながら推進活動をしています。男女共同参画社会の理解については慣習や心理的側面など難しいことも多く、推進委員でさえ正しく理解することが非常に困難です。正しい理解がされないと推進の方向が誤ってしまう可能性もあります。正しい男女共同参画社会のあり方とはどのように考えていったらいいのか、基礎的なことも学べる推進委員のためのテキストを是非作っていただきたいと思います。迷ってしまう人が抱える疑問や反論に答えられる理論的な回答が欲しいです。市町村の推進委員会に戸惑うことなく推進活動ができる道標をしていただきたいと思います。』
　これが一つ目です。
　『二つ目は、県内の男女共同参画に関する情報とネットワークを整備していただきたいということです。県の男女共同参画課と各推進センターと市町村の行政担当と推進委員会、そして市町村の推進リーダーが有機的にネットワークを組み、情報が行き交い相談し合える関係が作れることが理想です。市町村の男女共同参画担当はどこもほとんどが兼務であり、男女共同参画に専念することができない状況です。そこを補い、県とのパイプ役を担うために推進リーダーを位置付けて欲しいです。推進リーダーは市町村の担当者と二人三脚で動けるような地位を与えていただけたらと思います。ただ委嘱だけして、あとは市町村に戻って自分で動きなさいというやり方は余りにもったいないです。担当課の考え方次第のことが多く、推進リーダーの活動が十分に生かされていない市町村もあると聞いています。是非推進リーダーの市町村での活動の後押しをしていただきたいと思います。上野原市は山梨県の端にあり、何につけても中央との情報の格差を感じています。効率を考えれば中央集中は否めないのかもしれませんが地域もがんばりたいのです。そのためには人口密度で計るのではなく、是非県民一人ひとりに同じ重きをおいた目を向けていただければと思っています。』
　以上です。

〔知事〕
　分かりました。

〔司会〕
　本当に予定した時間を大分過ぎておりまして、大変申し訳ありませんけども知事のほうから今日の感想を含めましてまとめのごあいさつをお願いいたします。

〔知事〕

皆様方、本当にありがとうございました。それぞれ活躍をしておられる中で切実ないろんなお話を聞かせていただきまして本当にありがとうございました。県としてできることは十分検討して、やれることはしっかりとやっていきたいと思っております。

なかなかやっぱり、こういう今おっしゃったような分野の問題というのは市町村との接点の問題が多いものですから難しい面はあるわけですけれども、皆様方がこれからも是非一つ山梨県における男女共同参画、女性の社会参画のリーダーとして一ついろんなノウハウとか知恵とか、いろんなご意見を我々にお知らせをいただきたいと思います。男女共同参画課があるわけですから、何かあれば遠慮なくおっしゃっていただければありがたいというふうに思います。

今日は皆さん貴重なお話をいただきまして本当にありがとうございました。

〔司会〕

以上をもちまして『ひざづめ談議』を閉めさせていただきます。